



なごや「聖歌」だより5月号2013

今月の予定

聖歌練習 半田 5月8日 復活祭

名古屋 聖体礼儀後、代式後 昇天祭と五旬祭

名古屋指揮当番

5日全員 19日エレナ廣石 26日ピーメン松島

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



復活祭と日曜日3 陰府くだり

「抱き合って慶べ！」と「パスハのスティヒラ第5調」が歌われ、祝いが最高潮に達し、4世紀のコンスタンティノーブル主教金ロイオアンの説教が読まれます。死への勝利、地獄への勝利が高らかに、リズムカルに宣言されます。この日だけは世界中で、司祷主教や司祭の説教ではなく金ロイオアンの説教が読まれます。

救世主の死は我等を救きたり。彼はこれに囲まれてこれを滅せり。彼は地獄に降りて地獄を虜にせり…(イザヤ61:1)

地獄は爾を下に迎えて悲しめり。けだし(なぜならば)空しくせられたり。悲しめり、けだし辱められたり。悲しめり、けだし殺されたり。悲しめり、けだし倒されたり。悲しめり、けだし縛られたり。……

死よ、爾の刺はいづくにか在る、地獄よ、爾の勝ちはいづくにか在る、(ホセア13:14)

ハリストス復活して、爾は落ちたり。ハリストス復活して、悪魔は倒れたり。ハリストス復活して、爾は墜ちたり。ハリストス復活して、生命は凱旋す。ハリストス復活して、死者は一も墓に在らず。

けだしハリストス死より復活して、死せしものうちに初実となれり。彼に光荣及び権柄は世々に帰す、アミン。

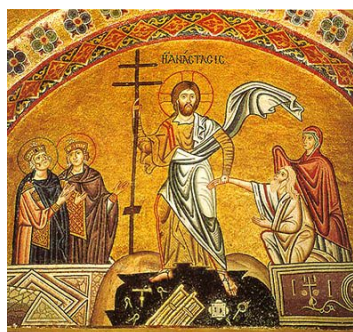
ハリストスの陰府くだりは聖書正典には含まれていませんが、古代教会では広く伝えられた伝承でした。聖使徒パウエルは「復活がない」という人たちに対して、Iコリント15章で「死者の復活がなければハリストスも復活しなかったはずです」と語り、死者はどのように復活するかと語る中で「死よ、爾の刺はいづくにか在る、地獄よ、爾の勝ちはいづくにか在る(死は勝利にのみ込まれた。死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか)」70人訳のホセア書13:14を引用して死への勝利を強調します(Iコリント15:55)。このことばはそのまま金口の説教に引用されています。

1世紀末のアンティオキア主教イグナティのマグネシアの教会への手紙には「預言者達も聖霊に

よって彼(ハリストス)の弟子だったのであり、彼を師として待ち望んでいたのです。それゆえ、彼等が正当にも待ち望んでいた方(キリスト)が到来し、彼等を死人の中から甦らせたのでした…」とあり、キリストが陰府に降り、既に死んだ預言者を蘇らせたことが書かれています。3世紀のヒッポリトスの「主教叙聖時の感謝祝文」にも「御子は、死を滅ぼして悪魔の枷を打ち破り、死の国を踏み砕いて正しい人を先に導き、(死の国の)境を定めて復活を証しするため、進んで引き受けられた苦しみに身を渡されることになった時…」と、陰府くだりに言及しています。

実は、陰府くだりの話は新約外典書のひとつニコデモ福音書の18章から26章に収録されたエピソードです。

陰府に閉じこめられていた旧約の預言者たち、ダヴィードやイサイヤが救世主の到来を察知して色めき立っているところに、陰府と悪魔が登場し、扉を閉めろ、鍵をかけろと押し問答をします。そこへイエスがやってきて「門を挙げよ、世々の門よ、挙げられ、光荣の王入り給わん(聖詠23:7)」という声がします。陰府は青銅の戸と鉄の門かんぬきを閉めて、錠を押さえ「光荣の王とは誰か」と尋ねると「万軍の主」と天使たちが答え、人間の姿をした光荣の王が入ってきます。陰府の一切の闇が光に照らされ、悪魔は縛り上げられ、穴の底に放り込まれます。ハリストスはアダムの手を握り、死の状態にあったすべての人類を生命であるご自分のもとに引き上げました。アイコンや聖歌、金ロイオアンの説教の内容、すべてがぴったり一致しています。



左ホシオスルカス修道院(ギリシア)、右サンマルコ大聖堂(ヴェネチア)

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

5. リズムと動き

リズムと動きは感覚の要素というより、祈りと音楽の土台、奉事と音楽芸術を結ぶかなめです。

上記の原則は素直な感情やごく自然な表現としての強弱に相反するものではありません。レーゲントは祈りの鼓動としての動きをとらえ、祈りの心拍として音楽を把握し、拍動として音楽をとらえます。それなくしては、いかに心を込めて上手に表現しても、メロディにもことばにも生命がありません。感情で埋め合わせしようとしても表面的にしか聞こえませんが、聖使徒パウロが言う「すべてのことが適宜に」「かつ秩序を正して行われる」ときに存在する動きや恩寵を熟知することです。それが祈りに生命を与えます。「霊的」に見せようとして余計な飾りをつけたくなるのは誘惑です。祈りの鼓動と活力さえあれば、徹夜祷の内容が半分しかわからなくても、長く感じません。たとえ理解できる言語であっても、いのちの酵母を滅菌してしまったら、神さまが美味しいワインを造ろうとし

たのに、酵母をなくした哀れな葡萄のようです。

祈りの息吹は「感じる」「感じない」をじっと黙想するより、リズムカルな反復とコントラストに鍵があります。音楽の動きを礼拝へと翻訳することが最も大切です。ポイントは英語の（日本語の）ことば自体の持つリズム構造をとらえることにあります。それなくしては音楽は真の礼拝にも真の芸術にもなりえません。歌詞となる詩の韻律、自由律、詩を読むときのリズム、散文、韻律的な聖歌のパターンを吟味し、また聖書から取られた歌を、ユダヤ教の音調アクセントを受け継いだものとして句や音調のユニットをとらえねばなりません。こういうことは今まで考慮されてきませんでした。ビザンチンやロシアのメロディに、ただ訳文をベタベタ張り付けただけでは、生きたものになりません。まるでガイコツに皮を張っただけで血も肉もありません。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 会衆唱 3

ビザンチン初期には当たり前だった会衆唱も、時代が下るにつれて、専門的な訓練を受けた聖歌隊がすべて歌うのが普通になってしまいました。なぜ13世紀以後会衆唱が失われたかについては色々理由がありますが、ひとつには7世紀以降、聖歌発展の中心が修道院に移行し、街の教会でも修道院の形で礼拝するようになったことがあります。修道院では毎日礼拝が行われます。修道士はいわば祈りのプロで、聖詠などは暗記しており、礼拝の仕組みや構造も体で覚えています。ですから複雑な順番や歌もなんなくこなせますが、一般信徒には参加が困難になりました。

もう一つの理由はロシアにおいて17世紀以後、宮廷が進んだ文化として西洋音楽を取り入れ合唱音楽が主流になっていく過程で、聖歌隊が宮廷の所有物になり、音楽的に特別な訓練を受けた人々が雇われて歌うようになったことがあげられます。西洋音楽はそれまでの単旋律のロシア聖歌とは発声の方法や音楽的な構造も異なるので、声楽の訓練を受けた人でなければ歌えませんでした。西洋音楽が民衆に浸透しロシアの音楽が生まれるのにはさらに百年以上かかりました。

日本では明治時代にニコライ大主教が単音譜を石版印刷で作って全国に配布し、伝教者や聖歌指導者を各地に派遣し、「ヨコナガ」の単音譜を手に全員で歌う伝統ができました。同じような方法はカルパト・ロシア（西ウクライナ）の教会にあり、信徒全員が祈祷書を手に持って一緒に歌います。

そうはいつても修道院で成立してきた聖歌とその組み合わせのシステムは複雑で、全部を全員で歌うのはむずかしいと思われることがあります。

そういうときにヒントになるのがビザンチン初期の会衆唱です。キリスト教が容認され信徒が激増したとき、礼拝に不慣れな人でも参加できるように考えられた工夫です。むずかしい部分は専門家に任せ、簡単な部分を全員参加で歌うというシステムです。

復活祭の聖歌にはこの古い形のなごりがたくさんあります。3月号で紹介した聖体礼儀のアンティフォン、第一アンティフォンでは「救世主や、生神女の祈祷によって…」の繰り返し部分のみを全員で歌い、「全地よ、神に歓びて呼べ…」などの句の部分は、誰かがソロで歌うか、誦経者がまっすぐに読みます。第2アンティフォンも同様です。第3アンティフォンは「神は興き…」という句を唱え、間にパスハのトロパリを繰り返します。全員で歌うときは指揮者は会衆の方に向けて指揮をし、聖歌隊は会衆の歌を支えます。（下記サイト）

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/music/Pascha.antiphon.congregational.pdf>

アンティフォンのほかにも、パスハのカノンの間に何度も挿入される「ハリストス死より復活し」という短いフレーズ、各歌頌の最後に歌われる「ハリストス死より復活し、死を持って死を滅ぼし…」というパスハのトロパリ全文は、かつての会衆唱の姿を留めています。ここだけを全員で歌うことも可能です。

ホームページのご案内

- 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

- 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

- 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料